

おわりに

本研究の実践では、課題追究学習を通して生徒の思考力、判断力、表現力を育成するとともに、人間としての在り方生き方を考える姿勢を身に付けさせることを目指した。また、それらの力を評価するペーパーテストの作成にも取り組み、それぞれ一定の成果をあげることができたと考えている。各学校において、本研究の実践を、生徒の実態に合わせて活用していただければ幸いである。その際、以下に示すような指導の工夫をお願いしたい。

1 継続的、反復的な課題追究学習の取り組み

思考力、判断力や表現力は、すぐに身に付くものではない。生徒に考えさせたり、話し合いをさせたり、発表させたりする活動を反復して行うことにより、徐々に育成されるものである。本研究の実践においても、生徒は、考えたり表現したりすることに慣れることで、次第にスムーズに取り組むことができるようになった。教師もまた、反復して行うことで指導に習熟し、より効果的かつ効果的に課題追究学習を実践することができると考えられる。日常の授業で繰り返し取り組むことが重要であり、その際には、学習のねらいを明確にして、「何のためにこの活動をするのか」を生徒にも理解させた上で実践することが大切である。

2 表現力育成の取り組み

学習した成果や考察した結果を適切に表現したり、根拠を明らかにして自分の意見や立場を表明したりする力を付けることは、これから社会に出て行く生徒にとって非常に重要である。また、何かを表現するためには、裏付けとなる知識・理解と自分なりの思考・判断に加えて、伝えようとする意欲も必要である。表現力は、幅広い学力が総合されたものであり、人間としての在り方生き方を考えることに直結するものであるともいえるのではないだろうか。「現代社会」において、自分の意見を書いたり、話し合ったことをまとめて発表したりすることなどに積極的に取り組み、表現力を育成することが大切である。

3 評価の工夫と評価力の向上

「知識・理解」に偏らない学力を身に付けさせるために、思考力や判断力、表現力を育む指導を工夫するとともに、それらを適切に評価するために、ペーパーテストなどの評価についても工夫することが大切である。本研究において、生徒は、知識・理解以外の観点からも評価されるという実感をもった結果、学習に取り組む姿勢に変容が見られた。教師も指導と評価を一体化するように考えて授業を構築し、学習活動とテストとを関連付けた結果、多様な観点から評価することができた。

また、記述式や論述式での評価も取り入れていく必要がある。例えば、2000年、2003年のPISA調査（OECD生徒の学習到達度調査）で読解力が1位であったフィンランドでは、選択式の問題でも選んだ理由を書かせる試験が行われている。このように成果の上がっている指導法を参考にし、論理的な思考力と、意見を相手に伝える力を育成するために、意見や理由について記述させる学習活動を積極的に取り入れるとともに、記述に対する評価を重視していく必要がある。新学習指導要領においても、「言語活動の充実」が掲げられ、各教科において論述や討論などの学習を充実させることが求められている。

これらのことに加えて、「知識・理解」に偏らない学力を評価するためには、教師の評価力を向上させることが必要である。多様な評価方法を知ることや、作問をするためのスキルを身に付けること、また適切な評価基準を作成することなど、教師が評価の在り方についてあらためて考え、取り組む必要がある。

高等学校における教科指導の充実
公 民 科
「現代社会」における課題追究学習と評価の工夫

発 行 平成21年3月
栃木県総合教育センター 研究調査部
〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町1070
TEL 028-665-7204 FAX 028-665-7303
URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>